

「映画を使用した英語学習」に対する 学習者の態度の質的研究

藤田 亮子¹

1. はじめに

文部科学省が2003年に「『英語が使える日本人の育成』のための行動計画」を提示し、コミュニケーション能力の育成を目指してから久しいが、文部科学省は、近年も「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013年)を考案するなど、英語教育改革を進めている。英語の指導に関しても、「使える英語」の能力の育成が重要視され、そのためには、教材に関してもより現実で用いられる英語に近いものが求められる。様々な言語教材の中でも映画は、学習者の学習意欲を高めることで学習用教材として適しているとされる (King, 2002 ; Shea, 1995)。

映画を用いた英語指導の利点を検証した先行研究では、多くが質問紙で事前事後の学習者の学習意欲を検証する、または学習者のコメントをそのまま記載して考察する形式が用いられ、質的研究手法を用いて分析した研究は多く見られない。そこで、映画を使用した英語学習に関する学習者の態度を明らかにするために、本研究では、質問紙の結果を質的研究の手法の一つであるKJ法を用いて分析した。

¹筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター

¹E-mail : fujita.ryoko.gt@u.tsukuba.ac.jp

2. 先行研究

2.1 映画を使用した英語学習

オーセンティック教材とは、教材用に調整された素材でなく、「真の話者が、真の聴衆に向けた真のメッセージ」の素材と定義される (Gilmore, 2007; Porter & Roberts, 1981)。オーセンティック教材の中でも映画は、動機づけ、異文化理解などにおいて有益であるため、幅広いレベル、様々な形式で利用されている (穂本・濱田, 2007; Hammer & Swaffar, 2012; Johnson, 2008)。

学習用教材としての映画の使用に関しては、様々な観点から検証されている。Kadoyama (2008) は一本の映画から短い場面を用いて、オーラルコミュニケーションを教える授業と、学習用教材を用いた授業を比較して、アンケートの結果、映画を用いたほうが学習者の学習に対する興味が向上したと述べた。穂本・濱田 (2007) は、文法の授業で映画を用いた指導を行い、映画を使用することで、学習者が文法学習により興味を持って取り組むことができたアンケートの結果から結論づけた。

2.2 質的研究手法とKJ法

質的データとは、インタビュー記録や自由記述の質問紙、日誌など、本質的な部分が数値で表現されていないデータである (佐藤, 2008)。量的研究が抽象化、一般化できる理論を目指して実施されることが多いのに対し、質的研究はその場の状況の意味を具体的に解釈し構成していくため、新しい仮想や発想、問題点を発見できる (秋田・能知, 2007; 竹内・水本, 2012)。

質的データの文字データを分析する方法として、佐藤 (2008) は、質的コーディング、量的内容分析、テキストマイニング、KJ法の4種類の分析技法を紹介している。中でもKJ法は、質的データからの仮説の生成、学習者の実態を詳細に記述することから、学習上の問題点や解決策の発見に適しているとされる (竹内・水本, 2012)。KJ法という名称は、考案者の人

類学者川喜田二郎のイニシャルからとられたもので、主な要点は、現場調査で集めたデータのアイデアを短く要約した文章を書いたカードをグループごとにまとめたり見直すことで、新たな発想を生み出そうとする分析法である（佐藤，2008）。

3. 調査

3.1 目的

映画を教材として用いた英語授業において、映画教材に対して学習者がどのような意識を抱いているかを、質的統計手法であるKJ法を用いて明らかにすることを本研究の目的とする。さらに、従来のKJ法は、紙媒体で分析を進めることが多いが、本研究では電子媒体で分析を行いその利点欠点を探った。リサーチクエスチョン（RQ）は以下である。

RQ：映画を教材として用いた英語授業に対して、学習者はどのような意識を持って英語学習を行っているか。

3.2 協力者

日本人大学生32名。専攻は教育学、法学部、経済学部などで、選択科目として英語の授業を受講した。

3.3 マテリアルと手順

「映画による英語学習に関してのアンケート」を実施した。質問項目は、以下の3項目。

Q 1. 映画を使った授業について、どう思いますか？

Q 2. 授業で用いる映画の聞き取りであなたが難しいと感じる点は何ですか？

Q 3. この授業を通じて、あなたの英語力で向上した点は何だと思えますか？

授業内容向上のために、上記の質問紙調査は実施されたが、今回の分析

においては、Q 1のみを分析対象とした。質問文の内容については、できる限り学生が自由に回答できる質問の仕方になるよう作成した。回答方法は自由記述形式で、無記名と指示した。

3.4 分析

分析を行うにあたって、32名の回答のうち、コメント量の少ないもの、同じような内容のものを除き、20名分の回答に限定した。Microsoft Excel 2010（以後Excel）を使用して、回答を電子ファイル化した。

KJ法の分析方法は、竹内・水本（2012）で、手順が詳細に提示されているため、参考にして分析を行った。竹内・水本では、KJ法の本来の方法に従って、紙媒体で行う分析法を紹介しているが、本研究においては、電子ファイル版で分析を進める方法を用いて分析を行った。

竹内・水本によると、KJ法の手順は大きく分けて、「ラベル作り」、「グループ編成」、「図解化」、「叙述化」の4ステップであるため、本論文では、その手順にそって分析方法を記述していく。

3.4.1 ラベル作り

ラベル作りとは、データをカードに転機する作業で、4文程度までならば1枚のラベルに収める（竹内・水本，2012）。1名分のコメントであっても、複数のメッセージが読み取れる場合は、複数のラベルを作成した。表1は、自由記述の一部である。例えば、1aと1bは1名の学習者からのコメントであるが、二つのメッセージを読み取ることができたため、二つのラベルに分けた。

表1. 学習者の回答の一部

1a	とても面白い。普通の授業と違って、登場人物たちの会話やより本場の会話。
1b	スピードは速いが聞く力がきたえられていい。
2b	教科書にはあまり出てこないような言い回しなども学ぶことができる。
3	映像を見ながら英語を学ぶので、ただ単に教科書を読むよりも内容と関連付けがし易く覚え易い。
4	ただテキストを読むよりも、何を言っているのかを知りたいと思ひ意欲的に学習できている気がする。
5	普通の授業とは違って面白いと思う。
6	普通の教科書を使うよりも映画の方が楽しめるし映画をみながら英語の勉強ができるので良い。
7	実際に使えるフレーズが多くてためになる。楽しい。
8	ナイトミュージアムの他の洋画にも興味を持てるので良いと思う。
9	普段の英語の授業より、取り組みやすかった。
10a	楽しい。

次に、ラベルを作成した。KJ法では、質的データを名詞程度の大きさのカードに書き写すが、本研究ではExcelによるKJラベルの自動生成ソフトを使用して、ラベルを作成した(図1)。ラベルが自動作成されることで、ラベルを一枚一枚作成する手間が省け、分析が効率的になった。



図1. ラベルの自動作成

3.4.2 グループ編成

3.4.2.1 小さなグループ

グループ編成では、「ラベル揚げ、ラベル集め、表札づくり」が一つのサイクルとなる（竹内・水本, 2012）。グループ編成は、小グループから大きなグループにまとめ、最終的にはグループが3つ程度となるようにまとめていく作業である。

「ラベル揚げ」では、作成したラベルを自分の前にならべる。KJ法で「ラベル揚げ」は、模造紙に広げるが、今回は、ラベル作りで作成したラベルを別のExcelシートに広げ、一覧できるようにした（図2）。

次の「ラベル集め」では、広げたラベルのうち内容の似ているラベル同士を集める作業を行った。自由記述の内容から読み取れる意識、メッセージに関しては、KJ法では「志」と呼ばれる。竹内・水本（2012）では、最初はペアなど小さなグループから始めることが推奨されている。今回のデータでは、表2のような内容を一つのグループとした。表2のグループでは、「普段の授業と異なるため、面白い」という共通した志が読み取ることができる。分類の結果、同じ志を持つグループが、7つ編成された。どのグループにも属さないラベルは、「離れ猿」と呼ばれ、単独のまま置いておいた。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R			
1	1a とても面白い。普通の授業と違って、登場人物の会話より本場の会話。			1b スピードは速い。聴取力が育たないと思う。			2a 興味が持てる。楽しんで英語が学べる。			2b 教科書には来ない出てこないような言い回しなども学ぶことができる。			3a 映像を見ながら英語を学ぶので、ただ単に教科書を読むより内容を理解しやすくて覚えやすい。			4a ただテキストを眺むよりも、何を言っているのかを聴きたいと思う。最初は言葉で書いておくといい。					
5	5a 普通の授業とは違って面白いと思う。			6a 普通の教科書よりも内容が面白く、英語の勉強ができると思う。			7a 実際に使えるフレーズが多くてためになる。楽しい。			8a ナイトミュージアムの他の内容でも興味を持ってみたいと思う。			9a 普段の英語の授業より、取り組みやよかった。			10a 物語を通してなので記憶や理解しやすい文法知識を習得しやすくなる。			10b 楽しい。		
11	11a 楽しいと思う。			11b 何を言っているのかを正確に分かなくて、授業で理解できる部分があるので普通に授業を見ている感じだと思います。			12a 楽しい。			12b 文庫が好きなだけ読ませばいいと思う。授業の進度はゆっくりで、単語のおかずに詳しくついていけると思う。			13a 興味を持ったものが多いので、面白く感じる。			14a 普段の英語で聞かないような、英語で見たことかと思ってしまうのでいいと思います。			15a とても面白い。		
15	15a 通常の英語と違って学んでとても面白いと思う。			16a すごく楽しいと思う。普通の英語を学んで好きです。			17a 映画を見られるので、普通の授業より楽しい。			18a 興味も興味も面白くてとても楽しいと思う。			18b ただ文庫の勉強でも身につかない。普通の英語は文法ばかりで面白くない。映画を見て自由に話している。			19a 楽しく身につけられる。					
19	19a 英語だけでなく時代背景なども同時に学べるので面白く思う。			20a 物語になっているので、理解しやすい。授業で話しているのと同じように話して話せるので、勉強になると思う。			20b 難しい英文を読んだらわかるのは、楽しみながらできるので面白いと思う。														

図2. ラベル揚げ

表2. 小グループの例

1a	とても面白い。普通の授業と違って、登場人物たちの会話やより本場の会話。
5	普通の授業とは違って面白いと思う。
6	普通の教科書を使うよりも映画の方が楽しめるし映画をみながら英語の勉強ができるので良い。
9	普段の英語の授業より、取り組みやすかった。
17	映画を見られるので、普通の授業より楽しい。

グループ編成の第三段階として、「表札づくり」に移った。「表札」とは、ラベル集めのグループの内容を1枚のカードに要約したもので、文章化することが奨励される（竹内・水本, 2012）。竹内・水本（2012）によると、表札作りの手順は以下となる。

全体感の把握 ⇒ 殺し文句の作成 ⇒ 家庭懇談会 ⇒ 短歌作り
⇒ 化粧直し ⇒ 清書

分析の一連の手順の例を、図3に示す。手順に則り、本研究においても第1段階として、「全体感の把握」をし、グループの並び替えなどを行った。次に第2段階として、各ラベルの志の核心を表現した「殺し文句」を作成した。例えば、図3にあるように、「1a. とても面白い。普通の授業と違って、登場人物たちの会話やより本場の会話」についての殺し文句は、「普段と違って本場」とした。その他のラベルにおいても同様に殺し文句を作成した。

第3段階として、「家庭懇談会」に移った。ここでは、殺し文句のみを見てキーワードである「点メモ」を考えるのであるが、そのキーワード作成を家族間の会話のような、くだけた雰囲気で行うことから「家庭懇談会」と呼ばれる。点メモとは殺し文句の中核的な意味から出されたキーワードであり、表札を作る際のアイデア帳となるため、複数も可能である（竹内・水本, 2012）。前述した殺し文句「普段と違って本場」に関しては、「普段

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	元ラベル			殺し文句		点メモ	短歌	表札
2	1a:とても面白い。普通の授業と違って、登場人物たちの会話より本場の会話。			普段と違って本場		普段と違う本場	普段教科書を使っている時と比べて楽しい	a 教科書を使った授業よりも楽しい (1a,5,6,9,10)
3								
4								
5								
6	5:普通の授業とは違って面白いと思う。			普段と違って面白い		面白い	普段と違う	
7								
8								
9								
0	6:普通の教科書を使うよりも映画の方が楽しめるし映画をみながら英語の勉強ができるので良い			教科書より楽しんで勉強できる		教科書じゃない	楽しい	
1								
2								
3								
4	9:普段の英語の授業より、取り組みやすかった。			普段より取り組みやすい		取り組みやすい	やる気	
5								
6								
7	17:映画を見られるので、普通の授業より楽しい。			映画が楽しい		楽しい		
8								
9								

図3. 表札作りまでの過程

と違う」、「本場」という点メモとした。

第4段階として、「短歌」作成に移った。短歌とは、殺し文句と点メモの要約であり、「表札」のたたき台となる。図3に示されるグループに関しては、元ラベルを見えないようにして、殺し文句と点メモのみを見て、「普段教科書を使っている時と比べて楽しい」という短歌を作成した。

第5段階として、表札のたたき台をより洗練させるために、「化粧直し」を行った。化粧直しでは、元ラベル・殺し文句・点メモを見ながら、表札のたたき台の文章を補足した。前述の短歌については、「普段教科書を使っている時と比べて」という部分を修正して、「教科書を使った授業よりも楽しい」とした。

第6段階として、化粧直しでできた表札を、新しいラベルに清書する、「清書化」を行うのであるが、本研究ではExcelを用いたため、清書版の文字の色を変え、分かり易くするのみとした。他のグループに関しても同様のプロセスで表札を作った。

3.4.2.2 大きなグループ

作成した小グループをより大きなグループにまとめる作業を行った。第

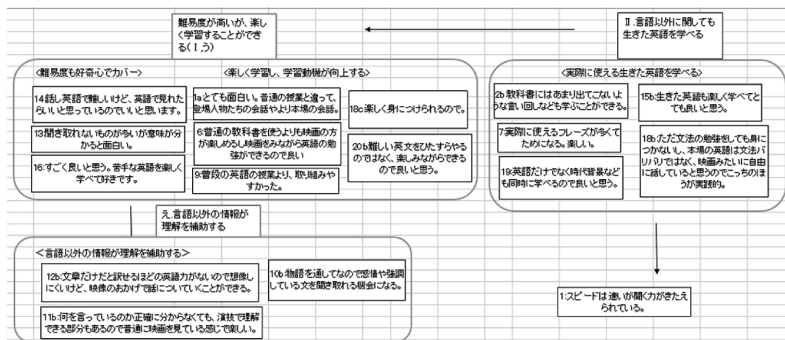


図6. ラベルを展開した図解化

なったことを示す。さらに、「言語以外の情報が理解を補助する」と、「難易度が高いが、楽しく学習することができる」は、関係が深いことを意味する。

これまで表札のみで関係性を明記していたが、最後に全てのラベルを展開して、図解化した。図6に図解化の結果を提示するが、紙面の都合上全てのラベルを表示するのではなく、代表的なラベルのみ記載している。

KJ法の最終段階として、「叙述化」があり、この段階では図が完成後、図で分かったことを、ストーリーにする(竹内・水本, 2012)。竹内・水本(2012)によると、図解化した内容を忠実に説明する場合と、図解化した内容から新たな発想へと展開していく方法がある。本研究においては、映画を使用した英語授業に対する学習者の意識を探ることが目的であるため、前者の説明する方法をとる。叙述化の詳細に関しては、次の結果と考察で述べていく。

4. 結果と考察

映画を用いた授業に関する学習者の意識として、学習者のコメントの分析の結果、主に3つの要素が確認された。一点目として、多くの学習者が、映画は難易度が高い内容であるが、楽しく学習できると感じて

いた。「話し英語で難しい」(14参照)や「聞き取れないものが多い」(13参照)など、教材としての映画の難易度が高いことは意識していたが、「(映画が)英語で見れたらいいと思っている」(14参照)や、「意味が分かると面白い」(13参照)など、映画の内容を英語のまま理解したい、という好奇心が、難易度が高いという学習者の負担感を上回ったとみられる。

また、楽しく学習することで学習意欲が向上するという意識もみられた。「普通の教科書を使うよりも映画の方が楽しめるし映画をみながら英語の勉強ができるので良い」(1a参照)や「楽しく身につけられるので」(18c参照)から読み取れるように、楽しいという意識も多く見られた。「難しい英文をひたすらやるのではなく、楽しみながらできるので良いと思う」(20b参照)というコメントにも示されるように、英語を楽しく学習したいという学習者の意識も感じられた。

二点目として、難易度や映画の楽しさ以外にも、生きた英語を学ぶことができるという利点を学習者が感じていたことも分かった。「教科書にはあまり出てこないような言い回しなども学ぶことができる」(2b参照)や、「実際に使えるフレーズが多くてためになる」(7参照)のように、学習者が英語学習用の教材で学んできた英語表現以外の内容に対しても興味をもって学習したことを読み取ることができる。「本場の英語は文法バリバリではなく、映画みたいに自由に話していると思うのでこっちのほうが実践的」(18b参照)のコメントにも表されるように、中高で学んできた基礎知識以外にも、大学生になってさらに実践的な知識を得たいという意味が示されている。これらの生きた英語を学ぶという意識が、学習意欲の向上につながったことが示唆される。

さらに、スピード、つまり話者の発話速度の速さに関するコメントも見られた。「スピードは速いが聞く力がきたえられている」(1参照)に見られるように、映画の難易度の高さの理由としては、発話速度の速さが主な特徴である。映画を含め生きた英語は発話速度が速いが、それに対しても、生きた英語を学習したいという意欲から、聞く力が鍛えられるという肯定

的態度になったと思われる。

三点目として、言語以外の情報が理解を補助するという観点も多くみられた。難易度が高い映画の学習という観点に関係の深い点として、言語以外の情報の効果は大きい。「何を言っているのか正確に分からなくても、演技で理解できる部分もあるので普通に映画を見ている感じで楽しい」(11b参照)や「物語を通してなので感情や強調している文を聞き取れる機会になる」(10b参照)にも示されるように、会話の内容が理解できなくても、映画の映像や文脈からある程度内容が予測できたことが、学習者の大きな助けとなったことが分かる。このことは、前後の会話にストーリー性があり、効果的な映像が提示される映画ならではの特徴と言えるであろう。難易度は高いが楽しく学習できるという過程として、言語以外の情報の多さが深く関係していることが示唆された。

5. まとめ

本研究においては、映画を教材として用いた英語授業に対して、学習者はどのような意識を持って英語学習を行っているかの検証を、質問紙を用いて行った。結果について、竹内・水本(2012)を参考にして質的分析手法の一つであるKJ法を用いて分析を行い、その分析方法を詳細に記述した。分析の結果、学習者の意識として、大きく以下3つの観点が見られた。まず、「難易度が高いが、楽しく学習することができる」という観点から、映画教材の難易度の高さを感じながらも、楽しく学習できるため映画は好ましい教材であるという意識を読み取ることができた。さらに「言語以外に関しても生きた英語を学べる」という、「生きた英語」としての映画教材に興味を持っていたことが分かり、その好奇心から難易度の高さも克服していたことが示唆された。また、「言語以外の情報が理解を補助する」という観点からは、視覚情報やストーリー性などの言語以外の情報が、理解の補助となっていたことが示された。

よって、教育的示唆として、映画教材は難易度が高いが、学習者が興味

をもつ内容であれば、教材として適している可能性が示唆された。また、難易度の高い教材を用いる場合は、言語以外の視覚情報などを用いることが有効である。さらに、外国語として英語を学ぶ日本人学習者にとって、オーセンティック教材は魅力的な教材であるため、取り入れることで学習意欲が向上することも示された。

上記のように、本研究のアンケート結果からは、映画教材に関して、肯定的なコメントのみが見られたが、その理由として、研究対象となったクラスが選択科目であったため、多くの学習者が映画での英語学習に興味を持っていたためと考えられる。仮に、必修の授業などで同内容のアンケートを行った場合、否定的なコメントもみられるなど、結果が異なった可能性がある。

本研究では、竹内・水本（2012）を参考にして、KJ法の分析を行ったが、分析を紙媒体ではなく、Excelを用いて行ったことに本研究の独自性がある。Excelを用いた電子版での利点としては、一番大きな点として、データ保存が便利なのが挙げられる。KJ法原案のように模造紙を用いて分析を行う場合、分析の場所の確保や、そのデータの保存方法が困難となる。その点、今回のようなExcel保存の方法では分析時の場所の確保やデータ保存方法を懸念する必要がなかった。一方、欠点としては、紙媒体での分析でのみ生まれる考察やアイデアがある可能性があったことである。全体像の把握や最後の図解化段階などでは、分析経過の全ての情報をPC画面上で広げて、全体感の把握を行うことが困難であった。また、紙媒体のほうが、ラベルの移動、記号の記入が容易であると感じられた。

本研究では、KJ法を用いたアンケートデータの分析を行ったが、KJ法は複雑な統計知識などを必要とせずに行うことができる方法（竹内・水本，2012）であり、授業改善のためのアンケート結果分析に関しても、実用的な手法である。また、映画を用いた英語学習の効果についても、さらに異なる視点から検証していくことが望まれる。

参考文献

- 秋田喜代美・能智正博（監修）. 『はじめての質的研究法』. 東京：東京図書.
- 梶本浩美・濱田 真由美（2007）. 「英文法学習のための映画活用法」. 『映画英語教育研究：紀要』 12, 41-52.
- 佐藤郁哉（2008）. 『質的データ分析法：原理・方法・実践』. 東京：新曜社.
- 竹内理・水本篤（2012）. 『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』. 東京：松柏社.
- 文部科学省（2013）. 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm
- Gilmore, A. (2007). Authentic materials and authenticity in foreign language learning. *Language Teaching*, 40, 97-118. doi:10.1017/S0261444807004144
- Hammer, J., & Swaffar, J. (2012). Assessing strategic cultural competency: Holistic approaches to student learning through media. *The Modern Language Journal*, 96(2), 209-233.
- Johnson, S. (2008). English in context: A teaching note. *Kansaidaigaku gaikokugokyoikukenyuu*, 15, 29-49.
- Kadoyama, T. (2008). Teaching communication through the use of films. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, 19, 243-252.
- King, J. (2002). Using DVD feature films in the EFL classroom. *Computer Assisted Language Learning*, 15, 509-523. doi:10.1076/call.15.5.509.13468
- Porter, D., & Roberts, J. (1981). Authentic listening activities. *ELT Journal*, 36(1), 37-47.
- Shea, D. (1995). Whole movies and engaged response in the Japanese university ESL classroom. In Casanave, C., & Simons, D. (Eds.), *Pedagogical perspective on using foreign language classes* (pp. 2-17). Keio University SFC Monograph #4.